



# いま、なぜ 鷹巣町なのか

白井正夫 朝日新聞編集委員

個人的な感慨も込めて、うれしいことがあった。「老い」を撮り続け、高齢者介護の現実を問いかけてきた記録映画監督の羽田澄子さん(72歳)が、1997年度の朝日社会福祉賞を受賞した。羽田さんの作品はいつも時代を映して新鮮だ。

福祉の現場で長年活動してきた人にとっての受賞で、記録映画づくりを通して高齢者福祉への社会的関心を呼び起こしてきたことが評価された。福祉問題を考える領域は、現場の実践活動だけでなく、あらゆる分野への広がりがある。羽田さんの受賞に、その広がりが確実に大きくなっていると、あらためて感じた。

羽田さんが昨年春、発表した作品に『住民が選択した町の福祉』(自由工房制作)がある。高齢者問題に取り組んだ羽田さんのドキュメンタリー作品としては、『痴呆性老人の世界』(岩波映画、1986年)、『安心して老いるために』(自由工房、1990年)に続く第3作目である。

映画の舞台は住民2万3000人の秋田県鷹巣町。高齢化率はすでに23%を超えた。福祉先進地として知られるが、農林業と商業がミックスした町も産業沈下が悩みだ。

映画は、全室個室の特養ホームを中心にした総合福祉施設「ケアポート」建築計画を町議会で否決された岩川徹町

長(48歳)の福祉政策をめぐる町内の動きを追っている。福祉の町づくりに参加する住民、町長選、町議選。そして、個室特養の代わりに老人保健施設の個室化で実を取る町長の施策。時々折々のニュースで報じられてきた出来事を通し、住民が自分の町の福祉のあり方をどう考え、行動してきたかを映画は丹念に描いている。

記録映画は映画館にはあまり縁はなく、住民グループなどの自主上映会や勉強会で細々と上映されているのが実情だ。『住民が選択した……』もその例にみれず、昨年2月、千葉県船橋市女性センターの勉強会を皮切りに上映行脚が始まった。ところが、1年余で各地の自主上映会は200回を超え、さらに50か所からフィルムの貸し出し申し込みがきている、という。

## 記録映画が描く 福祉立案システム

記録映画がこれだけ話題になる理由は何だろう、と考える。

何といっても、映画の舞台の「鷹巣町」がもつ今日性である。そして、その町に自治体の将来像を探ろうとした視点の確かさであろう。

ちょうど介護保険法案の国会審議が始まり、新制度の仕組みに対する賛否論議で高齢者介護への関心が高まった

年だった。それと併せて、各自治体の取り組みの差が浮き彫りになり、住民の目が自分が暮らす町、老いを迎える町に向いた。そうした時代背景もある。

羽田さんは1993年6月、『安心して……』の上映会で鷹巣町を訪ね、秋田県の北部にある町を知った。一番ひかれたのは、「ワーキンググループ」の存在だった、と語っている。1991年4月、42歳で初当選した岩川町長が福祉に町の再生をかけて、「福祉の具体策を私と一緒に考え、推進するパートナー」と呼びかけてできた住民グループ(現在150人参加)だ。テーマ別に福祉問題について調査、提言し、それが町の施策に生かされていく住民参加型福祉が育ちつつあった。

グループの提言から、町役場の出入り口がスロープになり、ホームヘルパーが増えて24時間巡回ヘルプが実現し、福祉機器の貸し出しが始まる。会員からは地方分権にならって「住民分権」の言葉も聞かれる鷹巣町独特のシステムだ。

羽田さんはその後、上映会で各地の実情を見るにつけ、「住民の意思が地域政治に正しく反映されることの大切さと住民の自覚の必要を痛感した」という。再び鷹巣町に目が向いたとき、町は福祉政争の真っ只中だった。ワーキンググループの提案も盛り込んだケアポート計画は「財源が不明確」「金がかかり過ぎる」と議会で否決された。1か月後に町長選が迫る1995年春からカメラが町に入ってきたのが「住民が選択した……」である。

最近、映画とは別にこの町の名がニュースになった。

介護保険法案の国会審議が大詰めを迎えた昨年11月、全国の81市町村長が参加して「福祉自治体ユニット」を設立した。もう論議で足踏みする段階ではないと介護保険制度を肯定的にとらえ、住民サイドにたつ福祉行政をすすめるようという首長のネットワーク。結成仕掛け人の1人が、代表幹事に選ばれた岩川町長だ。

ユニットが注目されたのは、大いに刺激的だったからだ。

基本理念の項目に「公共事業重視

の土建自治体から、住民の生活を重視する福祉自治体への転換」が掲げられていた。長年、地方政治を虜にしてきた政策の転換を求め、いわば「さよなら土権政治」である。

もう1つは、介護保険法案に疑義を表明して昨年11月、参院に慎重審議を求めた東京都武蔵野市の土屋正忠市長らの動きと照らして、介護保険をめぐる全国自治体内の二大対立軸とみられたからだ。全国87市長が訴えた要請文は「介護サービスが不足している現状では、地域に混乱をもたらす」と基盤整備などに国の責任を求めている。

## ■ 土木費泣いて ■ 介護保険に即応

福祉自治体ユニットは先進自治体の経験を学び、情報交換し、国や都道府県に政策提言していくと、3つの研究プロジェクトを発足させた。岩川町長は設立総会で「鷹巣町はいま介護保険制度の厚生省基準を上回るサービスを町民に提供している。そのノウハウはいつでも提供します」と、自信に満ちたあいさつをした。

岩川町長が町政を担って7年、介護サービスの基盤整備の遅れを嘆く自治体をよそに自信をみせるのも、福祉重視で町の予算を使ってきた政策転換があったからだ。ユニットのキャッチフレーズも町長の持論で、講演会などでたびたび発言している。

「町は介護保険をいまずぐでも何とか準備できます。それを実現できるお金の予算化はというと、年間予算100億円規模のうちたった6%ほどの高齢者福祉費で賄っています」

「(福祉予算が増えた分)予算で削ったのははっきりしています。土木費です」(「メディカル朝日」1997年5月号掲載の第4回平成患者学シンポより)

鷹巣町の一般会計予算に占める民生費の推移をみると、1991年度の11%(高齢者福祉費は1%未満)が1996年度19%(同7%)に伸びている。国の高齢者福祉政策の転換で自治体の福祉予算が総じて伸びたこともある。だが、町は限りある予算の使い方での体制を築いてきた。

それを箇条書きすると、

- 社協ホームヘルパー53人(常勤25人でそのうち男性が8人)
- 24時間体制の巡回ホームヘルパー派遣(1993年から実施)
- 老人訪問看護ステーション(1993年から町直営で毎日対応)
- 土、日曜も利用できるデイサービスセンター
- サテライト型の地域福祉センター設置(7か所計画のうち2か所完成)

そして、難産した「ケアタウン」建設がある。「ケアポート」計画が町議会で否決されて2年、昨年6月議会で関連予算が1票差ながら逆転可決された。ケアタウンは約14haの土地に第一期工事で高齢者や障害者が利用する在宅複合施設をつくり、第二期工事で介護住宅、町営住宅、子ども館などが予定される。

この在宅複合施設が開所する来年春に、町の名がまた話題になるだろう。平屋建ての全個室で老健施設80室と短期入所施設30室ができる。1人当たりの居住空間は20㎡、国の基準を大きく上回り、「おそらく日本最大級の広さ」(岩川町長)になる。しかも個室8室を集めた棟を渡り廊下で結ぶ配置で、グループホーム形式も取り入れた斬新な設計だ。

## ■ 負担増覚悟で ■ 求めた全個室

総事業費は50億円を超える大事業。町福祉保健課の説明では、1期分の総事業費が30億6000万円で国、県の補助金を除く約26億円が町の負担になる。広い個室をつくただけに町の負担も増え、地方債を含めてまかなう。それでも、町予算の中に占める借金返済のための公債費はピーク時の2004年度で14%(1997年度は9%)といい、財政上は心配ないという。

岩川語録に「政策順位を見極め」がある。「住民が政治に何を求めているか。要求の最も高いのが介護を含む福祉だった」(ユニット設立総会のあいさつから)と、「最も」を強調する。よく誤解される福祉一辺倒町長ではなく、再選されたときも2期目の課題として「新空港

を中心とした道路整備」もあげている。町内に7月開港する大館能代空港(あきた北空港)にも、町の活性化はかかっている。

町では社協ホームヘルパーは町職員に準ずる待遇で人気職種だ。若者も集まり、町内屈指の元気職場だ。今年も若干名の募集に、54人が応募した。近隣市町村でもずば抜けて多い数といい、それがもたらす活気といい、町長がねらう「町の再生を福祉で」も現実のものになってきているようだ。

第1、2作目も含めて各地の上映会には羽田さんはできるだけ出かけてきた。前述したように、その上映会の広がりには記録映画の世界では経験したことがないものだった。朝日福祉賞の受賞式で「各地の上映会に参加して、何か日本社会の中に地鳴りのような響きが生じて、何かが動き始めているような気がしました」と述べている。

介護保険の導入などで、21世紀の自治体は大きな変革を迫られるとみられている。羽田さんが感じ取った「動き」が、変革につながるうねりになって欲しい、と思う。全国3300自治体の中で鷹巣町が絶対とは言わない。だが、町の福祉が形づくられるプロセスは、これからの自治体のありようの1つを示している。

羽田さんは、自由工房を経営する夫のプロデューサー工藤充さん(73歳)と映画をつくってきた。昨年7月に亡くなった母を、東京の自宅で福祉サービスを利用しながら夫妻で2年介護しながらの映画制作だった。鷹巣町の撮影現場にプロデューサーと監督が立ち会えず、羽田さんは町へ、工藤さんは自宅で母を介護することもあった。その逆の日もあった。

上映会の広がりには、羽田さんの制作マインドに対する共感の広がりもある。介護を背負いながら明日を見すえた映画を作る羽田さんの生き方に、共感する女性もまた多いことを、付け加えたい。